

1859（安政6）年12月、現在の岡山県久米南町に生まれ、少年時代から長らく苦学生生活を送った。1884（明治17）年から約11年間におよぶ第1回の渡米=留学期間中にキリスト教社会主義の影響を強く受け、入信すると同時に社会問題や都市問題に対する関心と研究を深めた。帰国後、草創期のわが国社会主義・労働運動の理論と実

践に尽くし、1914（大正3）年の第4回の渡米までは、国内を主な活躍の場とした。なお、この間の1904（明治37）年8月、日露戦争が勃発して約半年後に、日本代表として第2インター第6回大会（アムステルダム）に出席し、ロシア代表のプレハーノフと壇上で握手を交わして満場の喝采を浴びたことはあまりにも有名である。

国内での理論活動を見た場合、都市社会主義の主張が重要な構成部分となっているが、それは安部磯雄はじめキリスト教社会主義から出発した人物に共通して指摘できることである。著書『都市社会主義』や『東京経済雑誌』・『六号雑誌』・『労働世界』掲載の雑誌論文等からまとめると、主張の内容は二つに大別できる。



一つは、衛生問題打開策としてのスラムの改良やガス・電気・市街鉄道等の市有市営化を骨子とする都市事業論であり、もう一つは、三級選挙制度廃止=普選実施や市政腐敗批判を骨子とする市政改革論である。都市は一つの株式会社に見立てられた。株主たる市民が監視を怠らず、株式会社たる市が合理的で積極的な事業運営を行なうならば、株金=市税に見合うだけの配当=便益が得られるというのである。こうした主張が実践段階までいたることはほぼなかったが、都市問題を体系的に扱った点では、安部と並んでわが国の先駆者という位置付けも可能である。

生涯を通じた理論活動を見ると、初期の改良主義から晩期のレーニン主義まで左右の振れ幅が大きく、しかもそれを思想の発展と見ることは、理論内在的にも方法論的にも問題がある。ただ、労働者とともに歩む姿勢とインターナショナリズムの擁護という点では一貫しており、振れ幅が大きいのは、それが時々の政治体験や政治情勢に共鳴した結果だといえる。都市社会主義も、その一つの現れである。第4回渡米後、1921（大正10）年にソヴィエト入りし、その後はコミニテルン（第3インター）執行委員会の下で活動した。1933（昭和8年）年11月、モスクワの地で客死し、遺体はクレムリンの壁に眠っている。